



寄稿	01
田村 岳史会員 JpGU 西田賞受賞	01
山下 洋平会員 JpGU 西田賞受賞	02
情報	02
JO 目次	02
沿岸海洋研究目次	03
カレンダー	04
書評	07
『東日本大震災後の放射性物質と魚』	07
『東京湾』	08
学会記事	08
学会賞・岡田賞・宇田賞推薦依頼	08
環境科学賞推薦依頼	10
吉田賞推薦依頼	11
春季大会開催報告	12
通常総会議事録	14
会計報告	16
連載	18
アカデミア メランコリア(第39回)	18



寄稿 ①

田村 岳史会員が 第 5 回地球惑星科学振興西田賞 を受賞

北海道大学 低温科学研究所 大島 慶一郎

この度、日本地球惑星科学連合 2023 年大会において、本学会の田村 岳史会員が「衛星観測に基づく海水生産量の解明と全球海洋システム研究への展開」により第 5 回地球惑星科学振興西田賞を受賞しました。

田村会員が北海道大学大学院地球環境科学研究科の大学院在籍時より積み上げてきた最も大きな成果は、衛星による薄氷厚アルゴリズムの開発をベースに、世界初の全球海水生産量マッピングを成功させ、その高精度化を行ってきた研究です。全球の海洋熱塩循環は高海水生産域(沿岸ポリニヤ)で生成される高密度水が起点となっていることから、海水生産量の定量化は海洋熱塩循環に対し定量的な解析・理解を可能とするものです。田村会員による南大洋での海水生産量マッピングは、昭和基地の東方に 2 番目に大きい海水生産域があることを示し、そこが未知(第 4)の南極底層水生成域であることを予測し、その発見をもたらしました。また、南極メルツ氷河の崩壊により、その下流域の海水生産量が激減したことを示し、それによりアデリーランド沖の南極底層水生成が激減することを予測し、その後観測研究で実証されました。田村会員が作成した、海水生産量及び海水生成・融解に伴う海面熱塩フラックスのデータセットは Web で公開され、数値モデルの検証・境界条件データとしても含め、世界中の研究者に利用されています。

田村会員は、2012 年に国立極地研究所に赴任してからは、南極地域観測第 IX 期及び第 X 期(2016-2028 年度)の重点研究観測の所内代表者の一人として、大気-氷床-海水-海洋の相互作用の研究を中心に進めてきました。そのプロジェクトにより、昭和基地の近傍に位置し南極最大級の流動速度をもつ白瀬氷河の海洋による

融解プロセスが実測から解明されました。さらに、東南極最大の氷床融解加速域であるトッテン氷河沖の観測を、田村会員の主導により、米・豪・英・独との国際共同観測として推し進め、海洋による氷床融解プロセスの解明も含め、日本だけでは成し得ない成果を生みつつあります。このような田村会員の持つ学際性・国際性は今後の海洋学の推進には不可欠であり、田村会員のますますの御活躍を祈念するものです。



受賞の後、高橋幸弘 JpGU 会長(左)と田村岳史会員(右)



寄稿②

山下 洋平会員が 第 5 回地球惑星科学振興西田賞 を受賞

北海道大学 大学院地球環境科学研究院 鈴木 光次

この度、北海道大学の山下 洋平会員が、2023 年 5 月に幕張メッセで開催された日本地球惑星科学連合 2023 年大会において、「水圏における溶存有機物の光学特性と動態に関する生物地球化学的研究」により、第 5 回地球惑星科学振興西田賞を受賞しました。

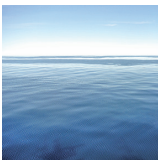
これまで海水中に大量に存在する溶存有機物の分子レベルの知見は著しく乏しいものでしたが、山下会員は、三次元励起蛍光光度法を用いて、溶存有機物の芳香族アミノ酸の蛍光特性が結合型アミノ酸中のチロシンやトリプトファンに由来することを発見しました。また、海洋の溶存有機物に含まれる腐植様物質の蛍光特性とその起源や海盆スケールでの分布に関する研究により、腐植様蛍光強度とみかけの酸素消費量の高いに高い正の相関が見られたこと等から、腐植様蛍光を示す有機物は海洋内部において従属栄養微生物による酸素を用いた有機物分解過程で生成する生物学的に難分解な成分であることを初めて見出しました。また、腐植様蛍光を有する有機物が海洋生物生産の制御要因である鉄の移送のキャリアとしても重要な働きを持つことを指摘しました。この腐植様蛍光を有する有機物は、近年、海洋炭素循環における微生物炭素ポンプの鍵となる物質としても注目されており、山下会員の高い研究先見性が評価されています。最近、山下会員は、海洋の溶存黒色炭素に関する研究も精

力的に行っており、溶存黒色炭素の主要な起源として、沿岸域では河川、外洋域では大気沈着や深海熱水系に由来すること等を世界に先駆けて定量的に明らかにしています。

このように山下会員は、独創的かつ先駆的な研究を継続的に展開しており、地球惑星科学振興西田賞受賞時までに国際誌に公表した論文 79 編は 6,000 件を超える被引用件数があるなど、世界的に高い評価を受けています。今後も革新的な研究成果を生み出し、当該分野で世界をリードする研究者となると同時に、後進を育成する教育者としても大いに期待されています。



山下洋平会員



情報①

Journal of Oceanography 目次

Journal of Oceanography

Volume 79 · Issue 3 · June 2023

Special Section on Scientific Researches Conducted by the Training Vessel Seiyō-Maru

Preface: scientific researches conducted by the training vessel Seiyō-Maru
J. Kanda · T. Katano · N. Horimoto-Miyazaki
C. Sukigara · J. Yoshida 185

Seasonal variation in alkaline phosphatase activity in the central part of Tokyo Bay, 2013
S. Sim · F. Hashihama · N. Horimoto-Miyazaki · J. Kanda 187

Temporal variation of particulate organic carbon flux at the mouth of Tokyo Bay
C. Sukigara · S. Otsuka · N. Horimoto-Miyazaki · Y. Mino 199

Oscillation and the resulting bait loss observed in pelagic longline hooks
D. Shiode · J. Yokotaki · M. Nemoto · T. Miyazaki · F. Hu, · T. Tokai 211

Occurrence patterns of larval mesopelagic fishes in the mouth of highly eutrophic Tokyo Bay, central Japan
R. Nagaiwa · A. Tachibana · M. Moteki 223

The origin and characteristics of dissolved organic carbon in the highly urbanized coastal waters of Tokyo Bay
A. Kubo · Y. Yamashita · F. Hashihama · J. Kanda 241

Temporal variations in the surface primary productivity and their causes at a station F3 in the inner Tokyo Bay
Hamana · C. Sukigara · N. Horimoto-Miyazaki · F. Hashihama
M. Yamamoto-Kawai · J. Kanda 253

Succession of three dominant diatoms, *Skeletonema*, *Thalassiosira*, and *Pseudo-nitzschia* in the inner area of Tokyo Bay from 2003 to 2017
 Y. Ueno · M. Takano · T. Katano · K. Yoshino
 N. Miyazaki-Horimoto · S. Yasui-Tamura · C. Sukigara
 I. Hamana · F. Hashihama · J. Kanda · T. Ishimaru 265

Seasonal changes in the vertical distribution and population structure of *Calanus sinicus* and *Calanus jashnovi* (Copepoda: Calanoida) in Sagami Bay, Japan
 T. Nonomura · J. Nishikawa · S. Nishida 295

Hydrographic structures of Tokyo Bay between 1992 and 2019 and evidence of temperature increase; observational results by the training vessel *Seiyo-Maru*
 H. Nakano · T. Aikawa · R. Hagita
 H. Hamada · T. Hayashi · H. Joshima · Y. Kitade
 N. Horimoto-Miyazaki · T. Miyazaki · M. Nemoto · A. Noda
 M. Sakaguchi · C. Sukigara · Y. Yamada · J. Yoshida 281

Rapid increase of surface water pCO₂ revealed by settling particulate organic matter carbon isotope time series during 2001-2009 in Sagami Bay, Japan
 Y. Mino · C. Sukigara · A. Watanabe
 A. Morimoto · K. Uchiyama-Matsumoto · M. Wakita · T. Ishimaru 317



情報②

Bulletin on Coastal Oceanography「沿岸海洋研究」目次

60 卷 1 号

[原 著]

- 津軽海峡東口において強い鉛直循環流を伴う長寿命の時計回り地形性剥離渦……………石崎 裕也・磯田 豊・田谷 浩志郎・小林 直人
 東京湾奥部における植物プランクトンの増殖に対する栄養塩制限の検討
 ……………日高 瞭・西山 健太・吉野 健児・安井 沙織・橋濱 史典・片野 俊也
 中立波の共鳴による島陰渦列の解釈……………藤居 流・磯田 豊
 衛星リモートセンシングを用いた伊勢湾のクロロフィル *a* 濃度の 1998 年から 2014 年の時系列解析
 ……………林 正能・永沼 元・二ノ方 圭介・中村 亨・中田 聡史・石坂 丞二
 環境項目と底生生物重量に関する既存資料からみた 1940 年代の東京湾……………野村 英明・石丸 隆

[総 説]

- 海洋プラスチック動態研究の最前線……………磯辺 篤彦

Extended Abstract

- シンポジウム「海洋プラスチック動態研究の最前線」まとめ……………磯辺 篤彦
 高分子材料科学を基盤としたポリオレフィン系マイクロプラスチックの形成機構の解析……………高原 淳・梶原 朋子・AN YingJun
 リモートセンシングと人工知能による街中・海岸プラスチックごみの定量化
 ……………加古 真一郎・松岡 大祐・種田 哲也・日高 弥子・杉山 大祐・村上 幸史郎・室屋 龍之介・磯辺 篤彦
 河川におけるプラスチック動態—マクロからマイクロまで……………片岡 智哉
 別府湾におけるマイクロプラスチック堆積速度—75 年間の変遷—……………日向 博文
 人新世の始まりを示す海底堆積物中のマイクロプラスチックとその意義……………加 三千宣・彼末 成樹
 深海環境におけるプラスチック汚染の実態把握……………中嶋 亮太
 海洋プラスチックデータの管理に関する国内外の動向……………道田 豊

[寄 稿]

- 神戸大学での海洋環境研究集会の総括—柳哲雄先生の一周忌を前に—……………林 美鶴

記事……………

Vol. 60, No.1**Original**

Long-lived Clockwise Topographic Separation Vortices with Strong Vertical Circulation at the Eastern Outlet of the Tsugaru Strait

..... ISHIZAKI Yuuya, ISODA Yutaka, TAYA Koushiro and KOBAYASHI Naoto

Nutrient Limitation on Phytoplankton Growth and Abundance in the Innermost Area of Tokyo Bay

..... HIDAKA Ryo, NISHIYAMA Kenta, YOSHINO Kenji, YASUI-TAMURA Saori, HASHIHAMA Fuminori and KATANO Toshiya

Interpretation of Island-Shadow Vortex Sequences by Resonance between Neutral Waves FUJII Yu and ISODA Yutaka

Time series analysis of chlorophyll *a* concentration in Ise Bay using satellite remote sensing from 1998 to 2014

..... HAYASHI Masataka, NAGANUMA Hajime, NINOKATA Keisuke, NAKAMURA Toru, NAKADA Satoshi and ISHIZAKA Joji

Environmental Parameters and Benthos Biomass of Tokyo Bay in the 1940s NOMURA Hideaki and ISHIMARU Takashi

Review

Research Frontiers in Ocean Plastic Dynamics ISOBE Atsuhiko

Extended Abstract

A Summary of the Symposium on "Research frontiers in ocean plastic dynamics" ISOBE Atsuhiko

Analysis of Formation Process of Polyolefin Microplastics on the Basis of Polymer Science

..... TAKAHARA Atsushi, KAJIWARA Tomoko and AN YingJun

Quantification of Urban and Coastal Plastic Litter Using Remote Sensing and Artificial Intelligence

..... KAKO Shinichiro, MATSUOKA Daisuke, TANEDA Tetsuya, HIDAKA Mitsuko, SUGIYAMA Daisuke, MURAKAMI Koshiro,
MUROYA Ryunosuke and ISOBE Atsuhiko

Behavior of Floating Macro- and Microplastic Debris in Rivers KATAOKA Tomoya

Temporal Variations of Microplastic Accumulation Rates in Beppu Bay – A 75-Year History from 1940 to 2015 –

..... HINATA Hirofumi

Microplastics in the Marine Sediments – the Implication of the Start of Anthropocene for Studies on Microplastic

..... KUWAE Michinobu and KANOSUE Naruki

Exploring the Plastic Pollution in the Deep-Sea Environment NAKAJIMA Ryota

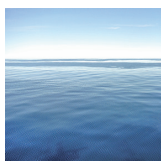
International and National Present Status of Marine Plastic Data Management MICHIDA Yutaka

Contribution

Summary of the Marine Environment Workshops at Kobe University – Before the First Anniversary of the Death of Prof. YANAGI Tetsuo –

..... HAYASHI Mitsuru

Proceedings



情報 ③

「海洋学関連行事カレンダー」

JOSNL 編集委員 杉本 周作

雪氷研究大会 2023

日程：2023年9月3日(日)–6日(水)

会場：日本大学工学部(福島県郡山市)

ウェブサイト：<https://www.seppy.org/activity/meeting/>

第30回 海洋工学シンポジウム

日程：2023年9月7日(木)–8日(金)

会場：日本大学駿河台キャンパス(東京都千代田区)

ウェブサイト：<http://www.oesymposium.com/index.html>

令和5年度日本水産学会 秋季大会

日程：2023年9月19日(火)–22日(金)
会場：東北大学青葉山新キャンパス(宮城県仙台市)
ウェブサイト：<https://jsfs.jp/act/annual-meeting/>

日本流体力学会 年会 2023

日程：2023年9月20日(水)–22日(金)
会場：東京農工大学小金井キャンパス(東京都小金井市)
ウェブサイト：<https://www2.nagare.or.jp/nenkai2023/>

第52回 北洋研究シンポジウム「北海道太平洋・日本海系群スケトウダラの加入変動に関わる要因の解明」

日程：2023年9月22日(金)
会場：函館市国際水産・海洋総合研究センター(北海道函館市)
[ハイブリッド開催]

日本海洋学会 2023年度 秋季大会

日程：2023年9月24日(日)–28日(木)
会場：京都大学吉田キャンパス(京都府京都市)
ウェブサイト：<https://www.jp-c.jp/jos/2023FM/index.php>

Remote Sensing of Marine Litter Workshop 2023

日程：2023年10月16日(月)–17日(火)
会場：Noordwijk, Netherlands
ウェブサイト：<https://atpi.eventsair.com/remote-sensing-of-marine-litter/>

気象学会 2023年度 秋季大会

日程：2023年10月23日(月)–26日(木)
会場：仙台国際センター(宮城県仙台市)
[口頭発表対面、ポスター発表オンライン]
ウェブサイト：<https://sites.google.com/metsoc.or.jp/atm2023/home?authuser=0>

PICES 2023

日程：2023年10月23日(月)–27日(金)
会場：Seattle, USA
ウェブサイト：<https://meetings.pices.int/meetings/annual/2023/pices/scope>

WCRP Open Science Conference 2023

日程：2023年10月23日(月)–27日(金)
会場：Kigali, Rwanda
ウェブサイト：<https://wcrp-osc2023.org/>

第20回 国際有害有毒藻類 国際会議

日程：2023年11月5日(日)–10日(金)
会場：グランドプリンスホテル広島(広島県広島市)
ウェブサイト：<https://icha2023.org/>

International BioGeoSCAPES science planning workshop

日程：2023年11月6日(月)–9日(木)
会場：Massachusetts, USA
ウェブサイト：<https://biogeosciapes.org/international-science-planning-meeting-november-6-9th-woods-hole-massachusetts-usa/>

19th World Lake Conference

日程：2023年11月7日(火)–9日(木)
会場：Balatonfüred, Hungary
ウェブサイト：<https://www.ilec.or.jp/en/wlc/wlc-11286/>

2023年度 水産海洋学会

日程：2023年11月10日(金)–12日(日)
会場：かでる 2.7(北海道札幌市)
ウェブサイト：<http://www.jsfo.jp/conference/>

第14回 極域科学シンポジウム

日程：2023年11月14日(火)–17日(金)
会場：国立極地研究所(東京都立川市)
ウェブサイト：<https://www.nipr.ac.jp/symposium2023/>

AGU Fall Meeting 2023

日程：2023年12月11日(月)–15日(金)
会場：San Francisco, USA
ウェブサイト：<https://www.agu.org/Fall-Meeting>

The 104th AMS Annual Meeting

日程：2024年1月28日(日)–2月1日(木)
会場：Baltimore, Maryland, USA
(In-person and online meeting)
ウェブサイト：<https://annual.ametsoc.org/index.cfm/2024/>

Ocean Science Meeting 2024

日程：2024年2月18日(日)–23日(金)
会場：New Orleans, USA (In-person and online meeting)
ウェブサイト：<https://www.agu.org/ocean-sciences-meeting>

令和6年度日本水産学会 春季大会

日程：2024年3月27日(水)–30日(土)
会場：東京海洋大学品川キャンパス(東京都品川区)
ウェブサイト：<https://jsfs.jp/>

EGU General Assembly 2023

日程：2024年4月14日(日)–19日(金)
会場：Vienna, Austria (hybrid meeting)
ウェブサイト：<https://www.egu24.eu/>

JpGU 2024

日程：2024年5月26日(日)–31日(金)
会場：幕張メッセ(千葉県幕張市)
ウェブサイト：<https://www.jpogu.org/>

高性能 水中用コネクタ



電気 / 光ファイバー / 同軸 / ハイブリッド

防水～深海 8000m 仕様
水中着脱可能なコネクタ



Series 40

光ファイバー & 電気
シングル & マルチモード
オープンフェイス防水



Series 80

ROV / ダイバー / プレート仕様
試験圧力 600bar
ステンレス鋼 & チタン対応



Series 10

最大使用電圧 6.6KV
最大使用電流 1000A
試験圧力 800bar



Series 24

IP66 オープンフェイス
IP67 嵌合時
IP68 モールド時



Series 35

小型シェル
ダブルオーリング
& コニカルシール



Series 51

水中同軸メタルシェル
インピーダンス1000A
試験圧力 100bar



GISCON Series

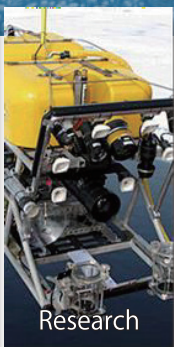
サブコン同等仕様
2～8極
試験圧力 600bar



Offshore
(oil & gas)



Defense



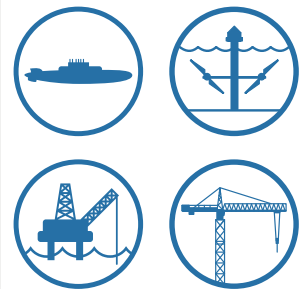
Research



Industry



Renewables



産業用コネクタ専門商社
株式会社 **ソルトン**
www.solton.co.jp



詳細は弊社営業担当までご連絡ください。t-omata@solton.co.jp



書評①

水産研究・教育機構叢書

『東日本大震災後の放射性物質と魚』

—東京電力福島第一原子力発電所事故から10年の回復プロセス—

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 編著

成山堂書店 2023年3月28日 発行

A5判 166頁 本体2,000円

ISBN 978-4-425-88711-8

評者：東京海洋大学 神田 穰太

2011年3月の震災と原子力発電所事故から10年以上が過ぎ、復興に向けた歩みが目に見える成果を上げた地域や分野は多い。しかしながら、震災前の状況に回復するまでに至っていない地域・分野もある。福島県を中心とする原子力発電所事故の影響は、一部ではなお長期にわたって続いていくであろう。産業としての水産業も、津波と原子力発電所事故の影響は依然として大きく、特に発電所事故の影響については、処理水の放出も控え、大きな課題が残ったままと言えよう。

福島第一原子力発電所事故については既に様々な角度から分析がなされ、環境への影響に関しても研究の成果が積み上がってきている。このような研究成果を背景に、事故の環境への影響を一般向けに解説する書籍もいくつか出版されている。海洋や海洋生物への影響を含めて紹介している書籍のうちで、本書は最新のものである。国立研究開発法人 水産研究・教育機構の編著によるもので、読者としては「水産学や環境科学に興味を持つ大学生・大学院生」を念頭に置いていると述べられている。本書は以下の7章によって構成されている。

- 第1章 東京電力福島第一原子力発電所事故と水産業の10年
- 第2章 事故後に海洋で起きたこと 一事故直後変動期一
- 第3章 海産魚類の放射性セシウム濃度
- 第4章 底魚類の生態と放射性セシウム濃度
- 第5章 淡水魚による放射性セシウムの取り込み
- 第6章 海洋生物のストロンチウム90濃度を測る
- 第7章 風評被害の実態

ご存じの方も多と思われるが、水産研究・教育機構の前身の水産総合研究センターの編著により、「福島第一原発事故による海と魚の放射能汚染」が2016年に刊行されている。最新情報も加えて事故後の10年間を纏めて振り返るという意味では、本書は2016年刊行の書籍のアップデートという意味もある。新たに刊行された本書では、例えば事故後の海水、海底堆積物への放射性物質移行に関する内容(第2章)が、関連するコラムも含めて大幅に内容が拡充されている。また、第6章にストロンチウム90に関する纏まった解説と、最終章の第7章に風評被害についての解説が加わっている。他方、2016年刊行の書籍では放射線や放射性物質に関する基礎的な解説、大気圏内核実験の影響調査に始まる水産庁水産研究所時代からの取り組みの歴史などが纏められている。両方の書籍は相補的な関係にあるとも言えるから、相互に参照することも有益

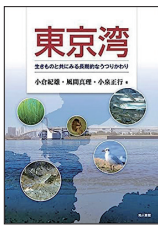
であろう。

他の多くの書籍と同様に巻頭にカラー図版を纏めてあるが、本書では海洋や陸水における放射性物質の拡散等を示す図版に加えて、カラー写真による「魚類図鑑」が5ページにわたって掲載され、本文に出てくる魚介類を参照できるようになっている。また、巻末には関連情報を入手できるウェブサイトのリストが掲載されているが、これはQRコード付きである。その他の細かい点も含め、読者に配慮して丁寧に作られている印象がある。

8つのコラムも含めて、各章では基礎的な解説からかなり専門的な研究データに至るまでの内容が含まれている。高度な内容に踏み込んでいる部分でも説明は丁寧にされており、「水産学や環境科学に興味を持つ大学生・大学院生」レベルの読者であれば無理なく理解できると思われる。また一般向けの解説を主体とする書籍ではあるが、広範な研究論文を文献として引用しており、専門的な調査・研究の導入にもなるだろう。

さて、本書の最終章(第7章)は、風評被害の分析とその解説に当てられ、事実と分析が淡々と述べられて、本書を締めくくっている。この章の冷静な記述は、ある意味でこの問題をめぐる「解決」の難しさを暗示するものかもしれない。全くの評者の私見で恐縮だが、風評という語には、消費者を不合理かつ非科学的な選択をする者として断罪するようなニュアンスが感じられるので(あくまで「個人の感想」だが)、評者は個人的にはできるだけ使わないようにしている。

現在の福島県海域産の魚介類の摂取が人の健康に有意に有害な影響を与えることはあり得ない。これは科学的な事実で、学会のニュースレターの読者に対してであれば、そこで話は終わりになる。原子力発電所事故によって、経済的あるいは精神的にも大きな被害を受けた漁業者、流通・加工業者、その他の関係者の方々からすれば、福島県海域産の魚介類を忌避する一部の消費者(加えて本章で解説されているように、一部の流通関係者)の判断が現在も続いているとすれば、まさに追い打ちするものであろう。それでも、ほとんどの議論はそこで止まってしまい、一方で(本章で紹介されているとおり、様々な取り組みがなされているものの)問題が「解決」したとは言えない状況が続いている。この点をどう考えていくべきなのか、もちろん評者にも答えがあるわけではない。「風評」を防ぐために情報の発信を控える(なるべく触れないようにすることは現実的で正しい判断なのか、他方で「科学」が信頼され受容されているとは見なせないような状況が何故生じているのか、次の10年の課題として残っているのだろうと思う。



書評②

『東京湾』 —生きものと共にみる長期的なうつりかわり

小倉 紀雄・風間 真理・小泉 正行 著
地人書館 2022年12月発行
A5版 263頁 本体3,400円
ISBN 978-4-8052-0960-8

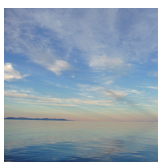
評者：東京大学 大気海洋研究所 小川 浩史

本書は、そのシンプルなタイトル「東京湾」に示されるように、東京湾に関する環境問題や水産業の変遷など多岐にわたるテーマを包括的に扱う。サブタイトルには「生き物と共にみる長期的なうつりかわり」とあり、特に、「長期的な変遷」に焦点を当て、行政による様々なモニタリングデータに加え、漁業者への聞き取り調査結果や市民活動の成果なども取り込みながら解析し、それに基づいてこれからの東京湾のあるべき姿について議論している。本書の制作に当たって、ベースとなっている一つの書籍がある。本書代表著者の小倉氏が編者となり、1993年に刊行された「東京湾—100年の環境変遷、恒星社厚生閣」。東京湾の長期的変遷を初めて総合的に取り纏めた名著である。それから30年が経ち、東京湾を取り巻く様々な状況も変化し、それによって東京湾の環境と生態系はどう変わり、その間に新たに確認されてきた良い兆候は何か、その一方で未だ解決されていない問題は何か、そして我々はこれから東京湾とどう向き合っていくべきか、について新しい知見に基づき多くの示唆に富む内容となっている。

本書は、第1章「東京湾との出会いとかかわり」、第2章「東京湾とはどのようなところか」、第3章「水環境の長期的なうつりかわり」、第4章「江戸前の魚は復活したのか」、第5章「これからの東京湾」から構成されている。特に導入の第1章で、3人の著者がそれぞれの異なったバックグラウンドのもと、どのように東京湾と付き合ってきたかが紹介されることにより、その先に続く、それぞれの専門による内容へスムーズに繋がっていく。また、わかりやすい説明のキャプションを付した図表や写真が多用されており、一般の

方々にも親しみやすい体裁となっている。さらに、本文の合間に、適宜、COLUMN というコーナーが設けられ、興味深い小話が計14箇所挿入されており、読み進めていく上で楽しい。一つ特に感銘したことがある。上述したように、本書は、行政による長期モニタリングデータをベースにしつつ、過去の東京湾の状況を知るために、主として漁業者への聞き取り調査を精力的に行い、それらが33件の記録として付表に纏められている。行政の調査データの多くはインターネットを通じて今後も保管、公開されるだろうが、東京湾を最も身近に知る漁業者の声は、聞き取りし記録しなければ、後世に伝わることはない。そこには必ず重要な情報が含まれている。従って、本書は貴重な資料としての役割も果たしている。

本書帯にも示されているが、東京湾は日本の首都東京の「海の玄関」である。それと同時に日本の地域環境問題の象徴でもある。過去、経済成長と引き換えに、水質・底質の悪化、埋め立てによる干潟・浅海域の喪失が半ば黙認されてきた時代も大きく変化し、依然として様々な問題が残されている一方で、良い兆しも現れてきた。本書の中でも繰り返し述べられているが、それは、市民が東京湾に対する関心を持ち続けたことが原動力となり、社会、行政を動かしてきた結果である。環境が改善し、生き物が戻ってくれば、東京湾への市民の関心はさらに高まり、良い循環が生まれる。本書は、東京湾がそのお手本になるための指南書というのが最後の感想である。東京湾のみならず、自然科学と社会との連携に広く関心のある方にも是非一読をお勧めしたい一冊である。



学会記事①

2024年度 日本海洋学会賞・岡田賞・宇田賞 受賞候補者の推薦依頼

2024年度 日本海洋学会賞・岡田賞・宇田賞受賞候補者選考委員会 委員長 石井 雅男

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞 受賞候補者選考委員会(以下賞候補者選考委員会という)では、これら三賞の2024年度受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けております。下記参考資料をご参照の上、推薦要領に従って、これら三賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただけますよう、お願い申し上げます。

岡田賞につきましては、2024年度から、ライフイベント等により研究活動の空白期間がある36歳以上の会員も推薦していただ

るようになりました。宇田賞には、研究グループとしての学術業績ばかりでなく、教育・啓発や研究支援などで海洋学の発展に貢献のあった会員を広くご推薦ください。各賞とも、女性候補者の推薦を歓迎します。

なお、各賞候補者の選考は、会員の皆様からの推薦と賞候補者選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えます。また、昨年度ご推薦いただいた候補者で、残念ながら受賞されなかった方々についても、改めてご推薦くださいますようお願い申し上げます。

【推薦要領】

以下の項目1～6について、A4版用紙1枚に記入し、電子メールにてお送りください。推薦用紙は日本海洋学会のホームページからダウンロードできます。

http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards

1. 候補者の氏名と所属機関

(岡田賞の場合は、生年月日も記入してください)

2. 受賞の対象となる研究課題

(宇田賞の場合は、受賞の対象となる学術、教育、あるいは啓発に関する業績)

3. 推薦理由

4. 推薦の対象となる主要論文(宇田賞の場合は省略可)

5. 推薦者の氏名および所属機関と電子メールアドレス

6. 推薦日付

審査の際の参考とするため、各候補者の略歴と、学会賞、岡田賞の受賞候補者については業績リストを、宇田賞については推薦対象課題に関する資料を、編集可能なマイクロソフト・ワードの電子ファイルとして、電子メールに添付してお送りいただけますようお願いいたします。

締切日：2023年9月8日(金) 必着

送付先：電子メールの件名を「日本海洋学会 2024年度 賞候補者の推薦」とし、jos@mynavi.jp宛にお送りください。なお、添付ファイルには必ずパスワードを設定していただき、パスワードは別の電子メールで送信をお願いいたします。

〈参考資料〉

日本海洋学会 学会賞・岡田賞・宇田賞細則(抄)

第1条 日本海洋学会会則第37条第1項および第3項の定めるところにより、日本海洋学会賞(以下学会賞という)、日本海洋学会岡田賞(以下岡田賞という)および日本海洋学会宇田賞(以下宇田賞という)の選考に関する規定を本細則で定める。

2) 学会賞は本学会員の中で海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。

3) 岡田賞は受賞の年度の初めに(4月1日現在)原則として36歳未満の本学会員で、海洋学において顕著な学術業績を挙げた者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。ただし、当該会員のライフイベント等による研究活動の空白期間を考慮し、年齢制限を緩和することができる。

4) 宇田賞は顕著な学術業績を挙げた研究グループのリーダー、教育・啓発や研究支援において功績のあった者など、海洋学の発展に大きく貢献した本学会員の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。

(以下省略)

Call for Nominations for FY2024 Oceanographic Society of Japan Research Awards

The Oceanographic Society of Japan (JOS) announces the call for nominations for its three awards in recognition of achievements in oceanographic research. Nominees and nominators must be members of the JOS.

1. The JOS Prize

The JOS Prize, the Prize of the Oceanographic Society of Japan, is awarded to a member of the Society who has made outstanding contributions to the advancement of oceanography. The JOS Prize is awarded to one recipient each year.

2. The Okada Prize

In memory of the late Professor Takematsu Okada, the Okada Prize is awarded to young members of the Society who have made outstanding contributions to the advancement of oceanography. The Okada Prize is awarded to up to two recipients each year.

In principle, members younger than 36 years of age on April 1 of the award year (2024) are eligible for nomination. Beginning with the award in FY2024, members 36 years of age or older who have a gap in research activity prior to age 36 due to life events, etc. are also eligible.

3. The Uda Prize

In memory of the late Professor Michitaka Uda, the Uda Prize is awarded to a member of the Society who has made a significant

contribution to the advancement of oceanography, either through outstanding leadership of a research group, or through outstanding roles in educational outreach or technical support. The Uda Prize is awarded to several recipients each year.

Nominators are also encouraged to nominate candidates who were nominated last year but did not win an award.

Winners of these awards will be selected from the nominees by the nominators and the Awards Committee.

Nominations must be written in English or Japanese and should include the following information:

- The nominee's full name, date of birth (for the Okada Prize only), and affiliation.
- The nominee's research topic for the award.
- A description of the nominee's research achievements.
- A list of the nominee's major publications (not required for the Uda Prize).
- Nominator's full name, affiliation, and e-mail address.
- Date of nomination.

The form of nomination for each prize is available from JOS's website at:

http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards

Please also send a short curriculum vitae for each nominee, a list

of publications for the JOS Prize and the Okada Prize, and reference materials for the Uda Prize, as editable Microsoft Word files attached to an e-mail. We welcome nominations of female candidates for all awards.

Please submit your nomination to:

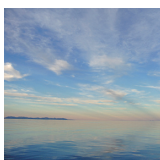
jos@mynavi.jp [Subject: Nominations for FY2024 JOS Research Awards]

Please be sure to set a password for the attached file and send the password in a separate email.

The Deadline is on September 8, 2023

Masao Ishii

Chair, 2024 Awards Committee of the Oceanographic Society of Japan



学会記事 ②

2024年度 日本海洋学会 環境科学賞 受賞候補者の推薦依頼

2024年度 日本海洋学会 環境科学賞 受賞候補者選考委員会 委員長 藤井 賢彦

日本海洋学会会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。日本海洋学会 環境科学賞 受賞候補者選考委員会(以下、選考委員会という)では、2024年度環境科学賞の受賞候補者について会員各位からの推薦を受け付けます。

本賞は、海洋環境保全に関わる学術研究の発展、啓発および教育に大きく貢献した会員を表彰するものです。環境科学賞の制定の経緯、目的等に関しましては、学会 HP に掲載の日本海洋学会環境科学賞「設立趣旨」(http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/jos_awards)、または会則第6章第37条をご参照下さい。

本賞は、海洋環境に関わる活動で高い評価を得ている会員を対象とし、選考にあたっては専門性を背景とした活動内容の意義が重視されます。受賞候補者の選考は、会員の皆様からの推薦(自薦可)と選考委員会からの推薦を併せた中から行い、多数の候補者が推薦された場合は若手研究者を優先いたします。本賞にふさわしい会員を積極的にご推薦いただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

【推薦要領】

以下の項目について記入し、下記の送付先まで郵送またはメールにてお送りください。

1. 候補者の氏名と所属機関・役職名

2. 推薦の対象となる活動

3. 活動内容などを含めた推薦理由

4. 推薦者(自薦含む)の氏名、所属機関、メールアドレス、推薦日付

5. 参考となる研究業績(論文リストなど)

締切日：2023年9月8日(金)必着

送付先：<郵送> 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル

(株) 毎日学術フォーラム内

日本海洋学会 環境科学賞受賞候補者選考委員会

<メール> 件名を「海洋環境科学賞受賞候補者の推薦」とし、下記宛に送信

jos@mynavi.jp

現在までの受賞者

2010年度：清野 聡子 / 2011年度：梅澤 有 / 2012年度：速水 祐一 / 2013年度：栗原 晴子 / 2014年度：神田 穰太 / 2015年度：野村英明 / 2016年度：藤井 直紀 / 2017年度：一見 和彦 / 2018年度：張 勁 / 2019年度：福田 秀樹 / 2020年度：河宮 未知生 / 2021年度：中嶋 亮太 / 2022年度：藤井 賢彦 / 2023年度：安中 さやか

Announcement of nomination for the Environmental Science Prize of the Oceanographic Society of Japan

The Oceanographic Society of Japan (JOS) is receiving nominations for the JOS Environmental Science Prize which will be awarded at the 2024 JOS spring meeting.

The JOS Environmental Science Prize is awarded to member(s) of the Society who has made outstanding contributions to the progress of academic research, enlightenment and/or educational outreach related to marine environmental problems. For details and purposes of the establishment of the award, please refer to “the purpose of establishment” of the Award on the Society’s website (<http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/>

[jos_wards](http://kaiyo-gakkai.jp/jos/about/)) or Chapter 6, Article 37 of the Rules of the Society.

This award is given to members who are highly regarded for their activities related to the marine environment. In the selection process, emphasis is placed on the significance of the nominee’s activities based on his/her expertise. Candidates for the award are selected from a combination of recommendations from JOS members (self-recommendation is possible) and those from the selection committee. If a large number of candidates are recommended, young researchers will be given priority. We encourage you to recommend outstanding members worthy of this award.

Recommendations must be written in English or Japanese and should

include the followings.

1. The nominee's full name, affiliation and title
2. The nominee's activity subject for the prize
3. Description of the nominee's achievements for the prize
4. The nominator (*)'s full name, affiliation, email address and date of submission *Self-nomination is possible
5. List of nominee's relevant scientific achievements, e.g., publications

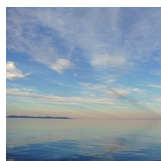
Please send the recommendation by mail or e-mail to:
Award Committee of JOS Environmental Science Prize
Mainichi Academic Forum, Palace-side Building

1-1-1 Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo 100-0003, Japan
jos@mynavi.jp [Subject: the Environmental Science Prize of JOS]

Deadline: Applications must reach us no later than September 8th, 2023

The winners in the past

2010 Satoko Seino / 2011 Yu Umezawa / 2012 Yuichi Hayami / 2013 Haruko Kurihara / 2014 Jyota Kanda / 2015 Hideaki Nomura / 2016 Naoki Fujii / 2017 Kazuhiko Ichimi / 2018 Jing Zhang / 2019 Hideki Fukuda / 2020 Michio Kawamiya / 2021 Ryota Nakajima / 2022 Masahiko Fujii / 2023 Sayaka Yasunaka



学会記事 ③

2024年度 日本海洋学会 吉田賞 受賞候補者の推薦依頼

2024年度 日本海洋学会 吉田賞受賞候補者選考委員会 委員長 池田 元美

日本海洋学会会員の皆様、

昨年度より、日本海洋学会に「海洋湧昇に関連する諸現象についての優れた研究業績を表彰する」新たな賞として吉田賞が創設されたことはご存じのことと思います。本年度も、本賞の受賞候補者を選考するため、「2024年度吉田賞受賞候補者選考委員会(以下吉田賞選考委員会という)」が設置され、受賞候補者選考を会長より依頼されました。

吉田賞は、物理的な諸現象だけでなく、化学的、生物学的な諸現象や、これらの諸現象が生物や生態系におよぼす影響なども含めて、湧昇に関連するできるだけ広い分野の研究を表彰対象としております。また、表彰は会員に限定せずに、国内外の全ての研究者を対象としています。このような国際的な賞により、広く海外の研究を含め、またこれまで日本海洋学会において主な研究対象となっていなかった分野も含めて、日本海洋学会において表彰するという趣旨となっています。

本委員会では、吉田賞の2024年度受賞候補者について、日本海洋学会員の皆様から広く推薦を受け付けることといたします。

下記の推薦要領に従って、吉田賞にふさわしい候補者を積極的に推薦いただきますよう、お願い申し上げます。吉田賞選考委員会では女性研究者の推薦を歓迎致します。

なお、連名によるご推薦も歓迎しますが、推薦代表者は日本海洋学会員の方をお願いいたします(共同推薦者については、会員・非会員を問いません。お名前など、推薦用紙の推薦者氏名欄にご追記ください。もし共同推薦者による推薦理由文のある場合は、推薦理由欄に追記するなど、推薦代表者の方に適宜取りまとめをお願いいたします)。

吉田賞候補者の選考にあたりましては、会員の皆様からのご推薦と吉田賞選考委員会からの推薦を併せた中から行うことを申し添えます。

【推薦要領】

以下の1～6の項目について、推薦用紙の書式に従って取りまとめ、電子ファイル化して、電子メールにてお送りください。

1. 候補者の氏名および所属機関
2. 受賞の対象となる研究課題
3. 推薦理由
4. 推薦の対象となる主要論文
5. 推薦者の氏名および所属機関と電子メールアドレス
6. 推薦者署名と推薦日付

推薦用紙(マイクロソフト・ワード形式)は、以下のリンク、またはQRコードよりダウンロードできます。

<https://kaiyo-gakkai.jp/jos/wp-content/uploads/2023/06/JOS吉田賞2024推薦用紙.docx>



なお、審査の際の参考とするため、推薦用紙とは別に、候補者の略歴と業績リストを、PDF形式及び編集可能なマイクロソフト・ワード形式の電子ファイルとして、下記の送付先(学会事務局)へ電子メールに添付してお送りください。

締切日：2023年8月25日(金) 必着

送付先：件名を「日本海洋学会 2024年度 吉田賞候補者の推薦」とし、jos@mynavi.jp宛にお送りください。なお、添付ファイルには必ずパスワードを設定していただき、パスワードは別のメールで送信下さるようお願いいたします。

<参考資料>

日本海洋学会(会則) 第37条 第6項(抄)
6. 海洋湧昇に関連する諸現象についての優れた研究業績の表彰のため、日本海洋学会吉田賞を設ける。

日本海洋学会 吉田賞細則(抄)

第4条 委員会は受賞候補者1件以内を選び、12月末までに選定理由をつけて会長に報告する。

2024年度吉田賞受賞候補者選考委員会
委員長 池田元美

Call for nominations for the Yoshida Award (FY2024)

The Oceanographic Society of Japan (JOS) is soliciting nominations for the Yoshida Award, which is a new award established in 2022 to commemorate the late Professor Kozo Yoshida for his pioneering research on ocean upwelling.

The Yoshida Award is granted to a researcher in recognition of their outstanding contributions to the advancement of ocean upwelling research, broadly defined, including physical, chemical, and biological phenomena and their effects on climate and ecosystems. JOS membership is not required for nominees, while lead nominators must be members of JOS. Nomination by a group including a non-JOS member is acceptable.

Nominations are considered by the Yoshida Award Selection Committee, which selects one finalist for approval by JOS Council.

Recommendations must be written in English or Japanese and should include the followings:

- The nominee's full name and affiliation
- The nominee's research subject
- Description of the nominee's research achievements
- List of the nominee's key publications
- The nominator's full name, affiliation, and e-mail address
- Signature of the nominator and the nomination date

Nomination form (Microsoft-Word) can be downloaded from the

following link and QR code.

https://kaiyo-gakkai.jp/jos/wp-content/uploads/2023/06/JOS_2024YoshidaAward_Nomination_Form.docx



Please also send a short curriculum vitae and a list of publications of the nominee, both as editable Microsoft-Word files and as PDF files attached to an e-mail.

We welcome nominations of female candidates.

Please send the nomination package by e-mail to jos@mynavi.jp
[Subject: Nominations for the FY2024 Yoshida Award of JOS]

Please make sure to set a password for the attached file and send the password in a separate e-mail.

Deadline for nominations: August 25, 2023

Selection Committee of the 2024 Yoshida Award

Motoyoshi Ikeda, Chair



学会記事 ④

2023年度 日本海洋学会春季大会 開催報告

大会実行委員会 委員長 土井 威志

大会日程：2023年5月21日(日)～26日(金)

ハイブリッド開催

現地会場：幕張メッセ

大会実行委員会 委員長：土井 威志(海洋研究開発機構)

1. 春季大会の概要

2023年度日本海洋学会春季大会は、日本地球惑星科学連合(JpGU)の大会において行われました。

2. 大会の開催について

2023年のJpGU大会は、現地(幕張メッセ)とオンラインを併用したハイブリッド開催となりました。

3. セッション・講演数

セッション数は234件(前年差+6)でした。日本海洋学会の学協会セッション(共催セッション)は25件(前年差-1)で、これらのセッションでの発表件数は505件(前年差+42)であり、セッション数、発表件数とも増加しました。

大会は、JpGU大会ではなじみのあるConfitシステムをベースとして行われました。口頭発表は現地会場とオンライン会議システムZoomを用いて行われました。ポスター発表は、現地会場での掲載に加え、Zoomのブレイクアウトルーム機能を用いたオンラインセッションにて発表が行われました。また、口頭セッションでのフラッシュトークも実施されました。

4. 学会の会合

通常、春の学会期間中に行われている各種委員会等の会合は大

会開催前の4月から5月にかけてZoomを用いたオンライン会議や書面などにて開催されました。日本海洋学会春季評議員会は5月21日(日)17:30-19:00に現地会場およびZoomのハイブリッドで開催されました。日本海洋学会総会は5月23日(火)17:30-19:00に現地会場およびZoomのハイブリッドで開催されました。

5. 表彰式

5月25日(休)に表彰式が行われました。2023年度にJpGUフェローの称号を授与された方々が表彰されました。また、西田賞、Taira Prizeの表彰も行われました。日本海洋学会の田村岳史会員と山下洋平会員が西田賞を受賞されました。

6. 展示

民間企業や大学、研究機関等による展示は現地とオンラインブースのハイブリット形式で実施されました。現地では、一般展示44件、大学・研究機関12件、書籍出版、関連商品14件、学会・学術団体12件が展示されました。オンラインでは、8件が展示されました。日本海洋学会も広報委員会のメンバーが中心となってブース展示を行い、学会の紹介、定期刊行物の紹介、学会の事業内容やパンフレット等の展示を行いました。新企画として、「海に関する動画」の再生や、お茶の提供などがあり、会員同士で気軽に雑談できるような場所が提供されました。



日本海洋学会の展示

7. イベント

大会期間中には、一線活躍する研究者へのインタビューを行うトークイベント、ランチタイムスペシャルレクチャー、スーパーレッスン等が行われたほか、JAXA-NASAの中高生向けの講演会が行われました。豪華景品がもらえる展示のクイズラリーも盛況だったようです。

8. 本大会を振り返って

2023年のJpGU大会は、昨年と同様に、現地とオンラインのハイブリッド形式で開催されました。ハイブリッド開催も2回目とい

JpGU2023大会のウェブページ(JpGU提供)

うことで、大会期間中は大きなトラブルもなく、スムーズに大会が実施されたように思います。現地でのスタッフや座長の対応などに加えて、参加者の皆様が適切に情報を収集し、対応してくださったおかげでスムーズに大会が実施できたと考えています。現地のみ開催、オンラインのみ開催の時とは勝手が異なり様々な面でご不便をおかけしたにもかかわらず、ご理解・ご協力頂いたことに改めてお礼申し上げます。

研究発表そのものは、現地のみ・オンラインのみの開催と遜色なくできた様に思います。さらに、コロナ禍以前の現地開催の雰囲気、活発な議論を深める機会や、研究以外の交流を深める機会がもてたことがとても良かった点だと思えます。

ポスター発表は、現地でも掲示され、コロナ禍以前の現地開催の雰囲気、質疑応答や雑談などがなされていたように思います。昨年は、ハイブリッド開催後に、1週間オンラインポスター期間が設けられましたが「盛り上がり欠ける」

「計2週間の開催が長過ぎて間延びした」といった不満が寄せられたため、今年は、ハイブリッド開催期間に、オンラインポスターセッションが設けられ、Zoomのブレイクアウトルーム機能を使って、発表者がオンラインで説明をするシステムが導入されました。研究について活発な議論が行われていたように思います。一方で「ブレイクアウトルーム機能で入室したら発表者と自分の1人だけで気まずい思いをした」「オンラインでの雑談がしづらい」といった不満は昨年同様に耳にしました。オンラインポスターセッションが、口頭セッションと重複開催されていた点や、現地のポスター発表を楽しんでいる参加者が多かったことから、オンラインポ

スターセッションに参加する人が少なくなったことも原因の一つだと考えられます。ポスター発表の概要を口頭セッションでフラッシュトークする新しい試みは、発表者側からも聴講者側からも好評だったように思います。

2回目のハイブリッド開催ということで、システムのトラブルや使い勝手が改善されたことに加えて、新型コロナウイルス感染症の位置づけが大会開催前の5月8日から「5類感染症」になったことで、昨年の開催よりも現地での交流が増えた分、比較的満足度の高い大会になった様に思います。一方で、ハイブリッド開催は、費用や準備の面で、多くの負担がかかることや、スケジュールが重複することが多くなることなどの問題もあり、開催方式についてはこれからも議論を続ける必要があると思います。また、個人レベルで、研究面以外の交流を楽しめる機会が増えたのは大変喜ばしく思いますが、今後は大会レベル、学協会レベルでも大規模な懇親会な

どが企画され、研究コミュニティ全体の交流が一層活発にできれば良いと思います。これからも安全で満足度の高い大会となるよう、JpGU事務局とも連携してまいりますので、積極的な発表申込み・ご参加をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本大会の開催にご協力頂いた学会員の皆様に感謝するとともに、開催に向けて尽力して下さったJpGU事務局の皆様に厚く御礼申し上げます。

9. 来年度の開催について

2024年度の日本海洋学会春季大会も、JpGU大会にて開催されます。2024年のJpGU大会の日程や開催方式については、情報が入り次第、学会員の皆様にお知らせいたします。例年では9月からセッション提案が行われますので、2024年度大会も積極的なセッション提案をよろしくお願いいたします。



学会記事 ⑤

2022年度 日本海洋学会 通常総会 議事録

日本海洋学会 集会担当幹事 中野 英之

日時：2023年5月23日(火) 17:30 - 19:00
場所：幕張メッセ国際会議場 103号室および Zoom を利用したハイブリッド開催
出席者：現地参加 24名、オンライン参加 36名、委任状 144名、計 204名

1. 開会

開会に先立ち、中野集会担当幹事より、学会会則第4章第28条の規定による定足数に達しており、総会の成立要件を満たしている旨報告があった。

2. 議長選出

根田 昌典会員を議長として選出した。

3. 会長挨拶(江淵会長)

総会開催に先立ち、江淵会長より挨拶があった。日比谷 紀之会員が IUGG Elected フェローに選出された件、中村 尚会員と西岡 純会員が令和5年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を受賞した件、第5回西田賞を田村 岳史会員と山下 洋平会員が受賞する件が報告され、祝意が示された。法人化についての目標を述べられた。2023年度の秋季大会は京都大学の会員が主催で、京都大学にて対面で開催される予定であることが述べられた。ようやく新型コロナ感染に関する制限が弱まり、対面で大会参加が可能になった一方でオンライン参加の便利さも選択肢として残して行くなど今後の方向性についても色々考える必要性について述べられた。会員数減少傾向に関して若い方の参加を促していきたい意向を述べられた。

4. 審議事項

1) 2022年度事業報告並びに決算報告について

(岡(頭) 幹事・野口 幹事)

2022年度事業ならびに決算について報告された。

2) 2022年度監査報告について (日比谷 監査)

2022年度の会計処理が適切に行われていたことを確認した旨報告があった。監査報告を踏まえ、2022年度事業報告、決算報告、監査報告が承認された。

3) 2023年度事業計画並びに予算案について

(岡(頭) 幹事・野口 幹事)

2023年度事業計画並びに予算について提案され、承認された。

4) 法人化について (江淵 会長)

- 法人化のスケジュール案が提案され、承認された。
- 定款案、細則案について提示され、6月末までコメントを募集することが述べられた。

5) 会則の改正について (岡(頭) 幹事)

学生会員に関する会則の改正(学生会員の定義及び会費の変更)について提案され、承認された。細則の改正(岡田賞受賞の年齢緩和に伴う変更)についても報告された。

5. 報告事項

1) 会務報告

庶務 (岡(頭) 幹事)

2022年4月から2023年3月の会員の異動状況について報告された。

編集

① JO (齊藤 編集委員長)

- JO Vol.77(1)から79(3)までの発行状況について報告された。2017年度から2022年3月までの投稿・受理状況について報告された。特別セッションの編集状況について報告された。
- 編集委員のジェンダーバランスの改善検討、および特集

号、レビュー論文の依頼を勧めたい意向について報告された。

② 海の研究 (久保川 編集委員長)

2022 年度の実績及び 2023 年度の報告について報告された。海の研究へ投稿し易くなる取り組みをすすめる意向について報告された。

③ JOS ニュースレター (岩本 編集委員長)

2022 年度の発行実績、2023 年度の発行予定について報告された。JOS の国際標準逐次刊行物番号 (ISSN) 付加の申請を行っていることが報告された。

研究発表 (土井 幹事)

- 2022 年度の秋季大会は初めてのハイブリッド形式にて開催されたことが報告された。
- 2023 年度の春季大会は JpGU 2023 の中でハイブリッド形式にて開催されることが報告された。
- 2023 年度の秋季大会は京都大学会員により、京都大学を開催地として完全対面形式で実施されることが報告された。

賞選考

学会賞・岡田賞・宇田賞 (江淵 前委員長)
選考過程および選考結果について報告された。

日高論文賞 奨励論文賞 (濱崎 前委員長)
選考過程および選考結果について報告された。

環境科学賞 (藤井 前委員長代理)
選考過程および選考結果について報告された。

吉田賞 (升本 前委員長)
選考過程および選考結果について報告された。

選挙管理 (中野 幹事)

役員投票、各賞可否投票および賞選考委員選挙結果について報告された。また、役員投票はオンラインで行われたことが報告された。

広報委員会 (川合 委員長)

2022 年度の活動について報告された。新しい取り組みとして Web サイトに新コンテンツ：海について学ぶ Web ポスター「わたしたちの生活を支える海」を追加について報告された。2023 年度の活動予定について報告された。

海洋環境委員会 (野口 委員長)

2023 年度の新体制および、「青い海助成」事業に 1 件応募があり採択されたことが報告された。

海洋観測ガイドライン編集委員会 (長谷川 委員長)

- 2022 年度は和文第 5 版、英文第 5 版の原稿の収集・編集したことが報告された。
- 2023 年度は和文第 5 版の出版、改訂・追加事項の検討の予定であることが報告された。

西南支部 (中野(俊) 支部長)

2022 年度はニュースレター 52 号の発行、ホームページの更新、維持管理、支部会連絡会等を実施したことが報告された。

海洋環境問題研究会 (福田 研究会会長)

- 海洋環境問題研究会の総会が 5 月 17 日開催され、福田会長の再任を推薦されたことが報告された。
- 秋季大会で 50 周年記念として本研究会主催のシンポジウムを開催予定であることが報告された。

沿岸海洋研究会 (速水 研究会会長代理)

- 2023 年度春季沿岸海洋研究会を 4 月 19 日オンラインにより実施したことが報告された。
- 沿岸海洋研究の 2022 年度の発行状況および 2023 年度発行予定が報告された。
- 2023 年度日本海洋学会秋季大会期間中に沿岸海洋研究会シンポジウムとして「閉鎖性海域における貧酸素水塊の現状と未来—長期変化と物質循環との関わり」の開催予定等が報告された。

海洋生物学研究会 (田所 研究会会長代理)

「海洋生物シンポジウム 2023」を 2023 年 3 月 20 日にハイブリッドにて開催したことが報告された。また同日運営委員会を開催したことが報告された。

教育問題研究会 (川合 研究会会長)

- 2022 年度は、海のサイエンスカフェ、女子中高生夏の学校 2022、JpGU 教員免許状更新講習への講師派遣、海洋教育の普及・実践のためのネットワーク作り、サイエンスアゴラ 2022 への出典、「海の出前授業」講師派遣事業、大学施設を利用した海洋教育の実践等の活動を実施したことが報告された。
- 関連学協会の連携の強化について報告された。
- 2023 年度の活動計画が報告された。教育問題研究会 20 周年を記念して、COSIA(海洋科学コミュニケーション実践講座)を再開する予定が報告された。

ブレイクスルー研究会 (茂木 研究会会長)

海洋学会ブレイクスルー研究会の解散の発議書が出され、2023 年 3 月 31 日をもって解散することが幹事会で承認されたことが報告された。

研究に関する将来構想 WG (岡(英) 幹事)

パート 2 として海に興味を持つ一般向けの記事作成等の活動を行う予定であることが報告された。

リクルート戦略 WG (渡部 幹事)

Googleform を通じた進路についての問い合わせに合計 22 件に対応したことが報告された。

2) 学会関連報告

学会動向 (原田 副会長)

- 学界関連の動向について報告された。詳細については JOS ニュースレターに掲載される。
- 科学全分野対象の賞に学生や若手研究者の推薦を積極的に行っていくと報告された。
- 第 4 次海洋基本計画が 4 月 28 日に閣議決定されたと報告された。
- 学術研究の大型プロジェクトの推進に関する基本構想の応募が始まったことが報告された。
- 「海洋」をテーマにした、CREST・さきがけの課題が立ち上がったことが報告された。

水産・海洋科学研究連絡協議会 (江淵 会長)

6 月 16 日に協議会が開催予定との報告があった。

日本海洋学会 2022年度 決算報告

(2022年4月1日-2023年3月31日)

収入の部

(単位：円)

科目	予算額(A)	決算額(B)	差引額(B) - (A)	摘要
1. 会費収入 2022年4月-2023年3月	14,976,000	14,901,000	-75,000	納入率：2022年2月末会員数基準
通常会員会費	11,550,000	11,231,000	-319,000	1,021人 / 1,045人 納入率 98%
通常会員会費(シニア)	576,000	608,000	32,000	76人 / 72人 納入率 106%
学生会員会費	738,000	822,000	84,000	137人 / 123人 納入率 111%
賛助会員会費	720,000	800,000	80,000	20人 / 18人 納入率 111%
団体会員会費	1,392,000	1,248,000	-144,000	52人 / 58人 納入率 90%
終身会員会費	0	192,000	192,000	4人
2. 事業収入	1,109,000	1,051,000	-58,000	
広告収入	174,000	174,000	0	NL掲載広告2件
会誌売上収入	135,000	117,000	-18,000	海の研究13セット
刊行物売上収入	0	0	0	
JO掲載料	800,000	760,000	-40,000	26件(会員17, 非会員9)
3. 積立金	823,000	110,544	-712,456	
環境科学研究助成	823,000	110,544	-712,456	宇野木基金より
4. 雑収入	3,011,841	2,974,409	-37,432	
受入利息	3,000	432	-2,568	
著作権料	3,008,841	2,973,977	-34,864	springer印税281万、JST0.3万、JAC15万
その他	0	0	0	
5. 寄附金	300,000	2,050,861	1,750,861	
日本海洋科学振興財団	200,000	200,000	0	
海口マン21	100,000	100,000	0	
大会開催戻り金	0	1,750,861	1,750,861	2022年秋季
6. 学会基本金から一時繰入	0	0	0	
小計	20,219,841	21,087,814	867,973	
前期繰越金	19,018,488	19,018,488	0	
合計	39,238,329	40,106,302	867,973	

支出の部

(単位：円)

科目	予算額(A)	決算額(B)	差引額(B) - (A)	摘要
1. 管理費	8,920,000	8,021,027	-898,973	
業務委託費	7,150,000	7,049,333	-100,667	事務局2022年3月-2023年2月、選挙システム
会議費	180,000	1,248	-178,752	お茶代
旅費交通費	600,000	117,414	-482,586	
通信運搬費	320,000	353,134	33,134	
消耗品費	250,000	87,076	-162,924	コピー代
雑費	420,000	412,822	-7,178	
2. 事業費	9,740,000	7,638,315	-2,101,685	
大会開催費	1,000,000	1,000,000	0	
海洋環境問題研究会	100,000	5,238	-94,762	
教育問題研究会	100,000	53,692	-46,308	
海洋生物学研究会	200,000	122,779	-77,221	
女子中高生夏の学校経費	50,000	0	-50,000	
JO発行経費	1,300,000	1,100,000	-200,000	Vol.79制作費、編集委員会費を含む
海の研究発行経費	1,300,000	917,917	-382,083	6回分、編集委員会費を含む
J-STAGE公開経費	100,000	18,889	-81,111	
JOSニュースレター発行経費	1,500,000	1,528,000	28,000	通常号4回分
広報委員会	130,000	66,000	-64,000	JpGU2022ブース出展料
会誌送料	800,000	558,687	-241,313	NL発送費は3回分
会員名簿発行費	330,000	323,840	-6,160	名簿webシステム運営費、地区別名簿
送金手数料費	70,000	56,900	-13,100	
学会賞金	800,000	900,000	100,000	
メダル製作費	10,000	8,376	-1,624	名前印字・メダル追加作成
若手集会助成金	300,000	287,281	-12,719	3件
若手研究者海外渡航援助	300,000	300,000	0	3名
青い海助成事業	600,000	-46,284	-646,284	助成なし、返金1件
大会ウェブサイト改修費	330,000	330,000	0	
法人化関連経費	300,000	0	-300,000	支払いなし
日本地球惑星科学連合会費	10,000	10,000	0	
地学オリンピック協賛金	50,000	50,000	0	
防災学術連携体会費	30,000	30,000	0	
男女共同学協会連絡会分担金	15,000	15,000	0	
連絡会シンポジウム経費	15,000	2,000	-13,000	
小計	18,660,000	15,659,342	-3,000,658	
3. 予備費	20,578,329	0	-20,578,329	
次期繰越金	0	24,446,960	24,446,960	
合計	39,238,329	40,106,302	867,973	

日本海洋学会 2023年度 予算

(2023年4月1日 - 2024年3月31日)

一般会計

収入の部

(単位：円)

科目	2022年度 予算額(A)	2023年度 予算額(B)	差引増減額 (B) - (A)	備考
1. 会費収入	14,976,000	14,847,000	-129,000	2023年2月末時点会員数
通常会員会費	11,550,000	11,407,000	-143,000	年会費 11,000 会員 1,037名 納入率 100%
通常会員会費(シニア)	576,000	608,000	32,000	年会費 8,000 会員 76名 納入率 100%
学生会員会費	738,000	792,000	54,000	年会費 6,000 会員 132名 納入率 100%
賛助会員会費	720,000	720,000	0	年会費 40,000 会員 18名 納入率 100%
団体会員会費	1,392,000	1,320,000	-72,000	年会費 24,000 会員 55名 納入率 100%
2. 事業収入	1,109,000	1,073,000	-36,000	
広告収入	174,000	174,000	0	NL 4回：2社
会誌売上収入	135,000	99,000	-36,000	海の研究 9,000 × 11 = 99,000
刊行物売上収入	0	0	0	要旨集 3,500 × 0 = 0
JO掲載料	800,000	800,000	0	
3. 積立金	823,000	2,223,000	1,400,000	
環境科学研究助成	823,000	823,000	0	積立金より(助成金3件60万、環境科学賞副賞10万、委員会費含む)
吉田賞		1,400,000	1,400,000	積立金より(メダル作成70万、委員会費20万円、招へい費用50万円)
4. 雑収入	3,011,841	2,726,079	-285,762	
受入利息	3,000	3,000	0	学会基本金等利息
著作権料	3,008,841	2,723,079	-285,762	
5. 寄付金	300,000	300,000	0	
寄付金	300,000	300,000	0	海口マン 21 100,000 日本海洋科学振興財団 200,000
小計	20,219,841	21,169,079	949,238	
6. 前期繰越金	19,018,488	24,446,960	5,428,472	
合計	39,238,329	45,616,039	6,377,710	

支出の部

(単位：円)

科目	2022年度 予算額(A)	2023年度 予算額(B)	差引増減額 (B) - (A)	備考
1. 管理費	8,920,000	8,900,000	-20,000	
業務委託費	7,150,000	6,800,000	-350,000	
会議費	180,000	310,000	130,000	評議員会、賞委員会他
旅費交通費	600,000	800,000	200,000	諸会合旅費
通信運搬費	320,000	320,000	0	通常郵便料、ML維持費
消耗品費	250,000	250,000	0	コピー、封筒他
雑費	420,000	420,000	0	会費およびJO掲載料クレジットカード入金手数料等
2. 事業費	9,740,000	11,695,000	1,955,000	
大会開催費	1,000,000	1,000,000	0	2023年度秋開催(対面開催予定)
海洋環境問題研究会	100,000	100,000	0	
教育問題研究会	100,000	100,000	0	
海洋生物学研究会	200,000	285,000	85,000	
女子中高生夏の学校経費	50,000	50,000	0	
JO発行経費	1,300,000	1,200,000	-100,000	6冊分、冊子体130部購入費
海の研究発行経費	1,300,000	1,400,000	100,000	6冊分、編集委員会(J-STAGE公開経費)
JOSニュースレター発行経費	1,500,000	1,500,000	0	4回分
広報委員会	130,000	140,000	10,000	
会誌送料	800,000	1,000,000	200,000	学会誌年6回、会員NL発送年4回+22年度1回分
会員名簿発行費	330,000	270,000	-60,000	名簿webシステム運営費
送金手数料費	70,000	70,000	0	
学会賞金	800,000	900,000	100,000	
メダル製作費	10,000	710,000	700,000	受賞者名刻印、吉田賞制作
海外招へい費用	0	500,000	500,000	
若手集会助成金	300,000	300,000	0	
若手研究者海外渡航援助	300,000	400,000	100,000	20万円 × 2件
青い海助成事業	600,000	600,000	0	20万円 × 3件
大会ウェブサイト改修費	330,000	150,000	-180,000	
法人化関連経費	300,000	800,000	500,000	法人化一連の業務・打合せ費用、税理士費用
日本地球惑星科学連合会費	10,000	10,000	0	
地学オリンピック協賛金	50,000	50,000	0	
防災学術連携体年会費	30,000	30,000	0	
男女共同学協会連絡会分担金	15,000	15,000	0	
連絡会シンポジウム経費	15,000	15,000	0	
小計	18,660,000	20,595,000	1,935,000	
3. 予備費	20,578,329	25,021,039	4,442,710	
合計	39,238,329	45,616,039	6,377,710	

アカデミア メランコリア (第39回) (若手のコラム)

日本大学 日本学術振興会 特別研究員 PD 阿部 貴晃

名城大学の木下 千尋さんよりご指名いただきました、日本大学学術振興会特別研究員 PD の阿部貴晃です。

学生時代は東京大学大気海洋研究所に所属しており、木下さんとは同じ研究室でした。私も木下さんもこれまで代謝速度に注目した研究を進めてきましたが、木下さんがウミガメ類の代謝速度を計測してきたのに対して、私は、魚類、なかでもサケを主な対象種としています。最近は、機会に恵まれクロマグロやニホンウナギなどの代謝速度も計測しています。今回のコラムでは、私が進めている魚類の代謝速度研究について書かせていただきます。



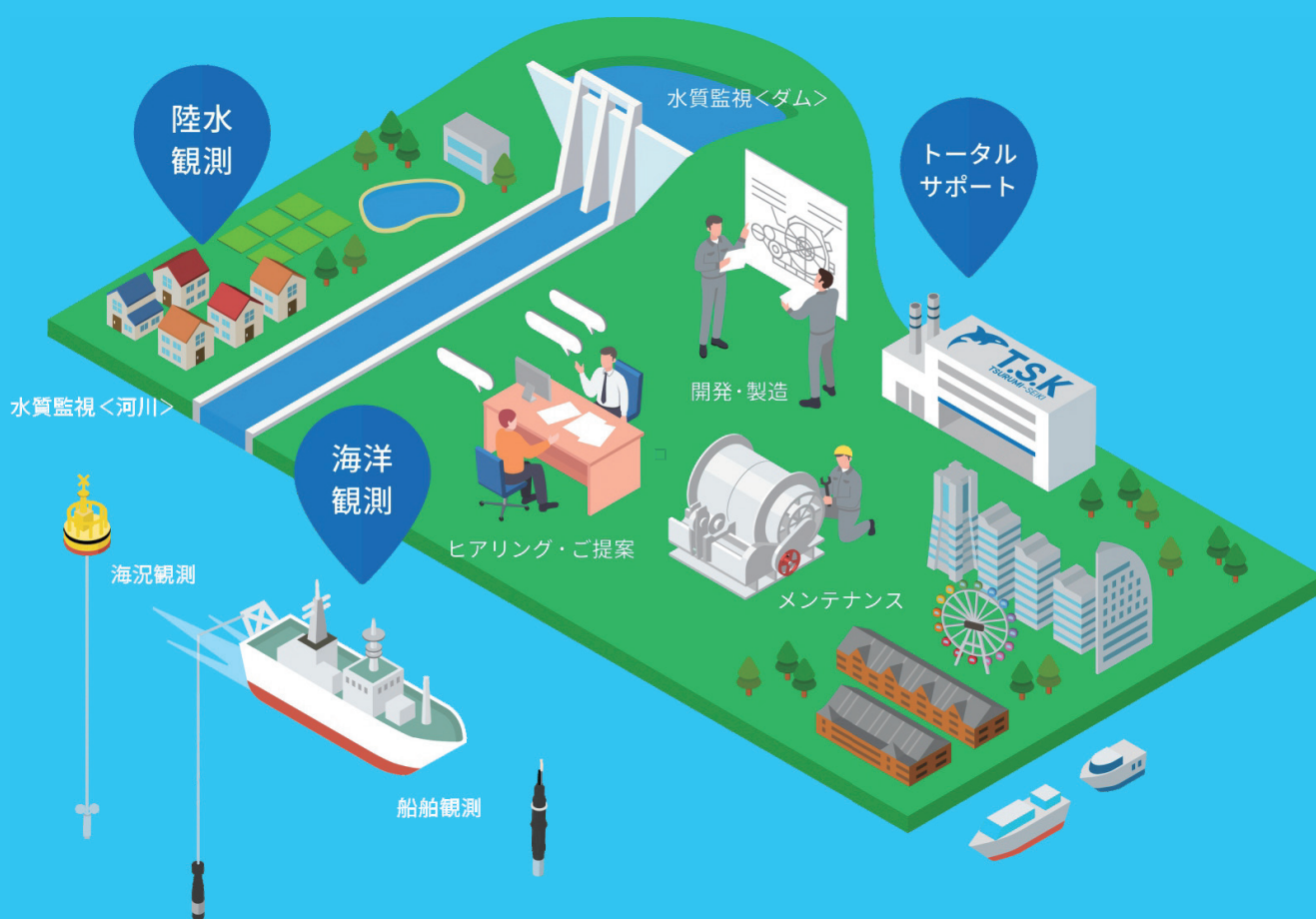
サケを持った筆者

代謝速度というと、健康やスポーツに興味がある方は基礎代謝といった言葉で馴染みがあるかもしれませんが、本が好きな方であれば「ゾウの時間ネズミの時間」(本川 達雄著)の代謝速度のスケーリング則でご存知かもしれません。代謝速度というのは、おおまかにいってしまえば、体内で起こっているエネルギーの産生速度を全部まとめたものを指しています。代謝速度は、その生き物の内的な状態によって大きく左右されるので、代謝速度は生理的な情報を多く含んでいます。そのため、代謝速度と一口にいっても、実験のデザインによって、色んなことを議論することができます。たとえば、私はサケ、ウナギ、マグロの代謝速度を計測していますが、代謝速度で議論しようとしていることは、それぞれの魚種で異なります。サケでは、集団間の生理的な適水温の違い、ウナギでは成長速度の個体差、マグロでは内温性(自身の代謝熱によって体温を保持する性質のこと)形成といったように、同種であっても集団間、個体間、成長段階間で代謝速度を比較することで、これらの問いを明らかにしようとしています。

魚の代謝速度というと、なんだか大して高くもなさそうだし、地味そうだなと思われるかもしれません。確かに実際にやってみると、魚を呼吸計の中に入れ、ひたすら呼吸系の溶存酸素の減少をモニタリングし、1回の実験では多くても数個体しか計測できず、一度の実験も1日かかりという、極めて地味な作業の連続です。しかし、同じ種であっても集団間で生理的な適水温は3℃以上違ったり、同じ環境で育っても個体によって代謝速度は2倍以上異なっていたり、体が大きくなると減少するはずの体重当たりの代謝速度が上昇したり……ダイナミックな結果を魚は示してくれます。

温度生態学には、「Hotter is better」という、高い体温を保つ動物は、高い代謝速度・活動性を保つことができるという説があります。ヒトをはじめとした内温動物は、熱産生に多くのコストを費やし激しい代謝速度を示すことで、どんな環境でもぶれにくい内的状態を維持しています。その一方で、外温動物は多様な代謝速度を示し、しなやかな生き方をみることができます。そんな魚類の生き様をみていると、熱がないことも悪くはないのかなど、いうことを感じさせてくれます。

終わりになき航海の パートナーとして。



海洋・陸水・大気観測における調査活動に
正しい知見と洞察を提供します。

株式会社 鶴見精機

<https://tsurumi-seiki.co.jp/>
sales@tsk-jp.com

本社・横浜工場サービスセンター

神奈川県横浜市鶴見区鶴見中央二丁目2番20号
TEL: 045-521-5252 FAX: 045-521-1717

T.S.K. America, Inc.

P.O. Box 70648 Seattle, WA 98127 USA
Phone: +1-206-257-4899
e-mail: tony@tsk-jp.com

水中測器製造部門(白河)

福島県白河市大信中新城字弥平田17-5
TEL: 0248-46-3131

リエゾンオフィス(インド)

Liaison Office (INDIA)
Level-12, Building No.8, Tower-C
DLF Cyber City-II, Gurgaon-122002
Haryana, India
Phone: +91 - 9810173319, 9560264316
e-mail: tski@tsk-jp.com

編集後記



7月2～29日まで白鳳丸の研究航海に参画しており、編集作業がほぼ航海期間と重なっていました。改修後の白鳳丸(詳細はニュースレター12巻1号の特集を参照)に乗船するのは初めて。航海には最大で16名の女性の乗船者(うち3名は乗組員)がおり、新設の女性用シャワールーム、増設されたトイレのおかげでこれまでの混雑が若干解消され助かりました。

一方で、中国、マレーシア、カンボジア、バングラディシュ、カメルーンなど多様な国からの留学生、外国人研究者の乗船がありましたが、特に忙しい観測中は掲示される情報が日本語のみの場合が多く、彼らにとってはストレスだったかもしれません。

今後、外国籍の学生や研究者は増えることが予想されるので、日英表記の徹底や部屋割りの工夫など、情報格差を生まない配慮が必要と感じました。

今航海の観測海域は西部北太平洋で、前半は亜寒帯海域、後半は亜熱帯海域でのおよそ1週間にわたる定点観測がありました。亜寒帯では曇空で冬の寒さ、亜熱帯は太平洋高気圧下で晴天かつ夜も

蒸し暑い日々が続きました。海況は、前半に半日ほど荒天があった以外は概ね良好で、観測の満足度は高かったように思います。

陸に帰ってみると、国連総長が「地球沸騰化」とコメントするほど、今年の7月は世界的に史上最も暑い7月だったとのこと。今は蝉の声を聞きながら、海上の方がいくらかマシな暑さだったと痛感しています。

そんな暑い最中に少しでも目の保養になるかと、今号の表紙には水産大学の柏野先生からいただいた海水の写真を使わせていただきました。「宗谷海峡を抜けてオホーツク海に少しだけ入った時」に撮影された写真で、多数浮かんでいる小さな氷は「ロシアから流れてきているのではなく、この場所が結氷温度になっていて、ここで凍ってできている」ものだそうです。

地球沸騰化が続けば、表紙のような光景が稀になるかもしれません。このニュースレターがお手元に届く頃には立秋を過ぎて、暑さが和らいでいることを願います。

(編集委員長 岩本 洋子)

広告募集

ニュースレターは学会員に配布される唯一の紙媒体情報誌です。
海洋学に関連する機器や書籍の広告を募集しています。
お申し込みは日本海洋学会事務局またはニュースレター編集委員長まで。

〒739-8521 広島県東広島市鏡山1-7-1 広島大学大学院統合生命科学研究科
電話/FAX 082-424-4568 /メール y-iwamoto@hiroshima-u.ac.jp

JOS News Letter

JOSニュースレター
第13巻第2号 2023年8月1日発行

編集 JOSNL編集委員会

委員長 岩本 洋子 委員 杉本 周作、張 勁、中田 薫

〒739-8521 広島県東広島市鏡山1-7-1

広島大学大学院統合生命科学研究科

電話/FAX 082-424-4568

メール y-iwamoto@hiroshima-u.ac.jp

デザイン・印制 株式会社スマッシュ

〒162-0042 東京都新宿区早稲田町68

西川徹ビル1F

http://www.smash-web.jp

発行



日本海洋学会
The Oceanographic Society of Japan

日本海洋学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル

(株)毎日学術フォーラム内

電話 03-6267-4550 FAX 03-6267-4555

メール jos@mynavi.jp

(写真の説明)

表紙の写真は、2022年1月に水産大学の練習船「耕洋丸」から撮影された海水の写真です(柏野 祐二 会員提供)。タイトル横の写真は2014年夏に北極海で撮影した風の写真です(編集委員長提供)。会員からの写真を随時募集しています。

ISSN 2758-8645